橋本治雑文集成

パンセⅢ

文學たちよ!

橋本治

河出書房新社

橋本治雑文集成

パンセⅢ

文學たちよ!

橋本治

河出書房新社

橋本　治（はしもと　おさむ）
一九四八年東京生れ。東京大学文学部卒業。作家。『桃尻娘』で衝撃的なデビューを飾って以来、小説、評論、エッセイ、翻訳にすさまじい健筆ぶりを示している。主著に『暗夜行路』『蓮と刀』『ハイスクール八犬伝』『雪の矢車草』『桃尻語訳　枕草子』『男の編み物手トリ足トリ』等。

橋本治雑文集成
パンセ III　文学たちよ！
一九九〇年三月二〇日　初版印刷
一九九〇年三月三〇日　初版発行
著　者　橋本　治
装幀者　鈴木成一
発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　営業　〇三―四〇四―一二〇一
編集　〇三―四〇四―八六一一
振替口座（東京）〇―一〇八〇二
印　刷　三松堂印刷株式会社
製　本　小泉製本株式会社
落丁・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯に表示してあります
©1990　Printed in Japan
ISBN 4-309-60393-9

CONTENTS

『Yの悲劇』評 7
そしてみんな引っくり返って——私とアガサ・クリスティー 9
バイホーってなんだろう——または詠嘆するアメリカ人 19
ロマンチックをしたかった!?——丸谷才一の『忠臣蔵とは何か』 25
インテリの裏本——山崎豊子 30
知性を持ってしまったヒーロー 35
熱 45
孤島の小林少年——江戸川乱歩とグロテスク考 50
山田風太郎『八犬伝』 94
後ろの偉人伝——『人間臨終図鑑』評 99
解説——山田風太郎『戦中派不戦日記』 104
雨戸をしめて——久生十蘭について 115
遁走詞章 135

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

どうしてあなたには自分の読みたい本が見つからないのか？ 159
講談とはなにか 178
理性の時代に――解説・有吉佐和子『母子変容』 183
両刃の剣――時代小説のおもしろさつまらなさ 192
『現代の青春小説』 199
桃尻余禄・いまだ時を翔けない少女 218
僕が青春小説をやるならば 226
中年の本 235
雑誌の時代 238
雑誌の友――「小説現代」特別付録 241
劇的なる純文学 286
紺紺と 304
解題＝俺が「文学者」なんかだったりしたら困っちゃうよなア……307

橋本治雑文集成

パンセⅢ

文學たちよ!

『Yの悲劇』評

私、推理小説読み始めたの、遅くって二十過ぎです。普通だと、高校生ぐらいで推理小説の素地作っとくんですけど、私、高校時代に本なんか読まなかったから、ことの必然として遅いんです。で、読んでなかったりすると、友達なんかについてけないから読んだんです。友達が「エラリー・クィーンなんて、きっちり理詰めで攻めて来るから面白い」ってんで『Yの悲劇』なんかを読みました。私ァ、クリスティーのケレンが好きだったんで、〝アァ、まともな論理というのもマスターしとかないといけないかな〟と思って読んだりした訳です。で、いけませんでした。かなりに前半なんすが、〝浮いてる一行〟というのがあったんです。〝アレ、これどう続くんかな?〟というのがあって、それがさり気なくも、説明抜きで放ったらかしだったんです。だもんで私、スグに犯人が分っちゃったんです。犯人分りながら、あの長いヤツ、最後まで読んだんです。私、今も昔も、活字読むのが好きじゃない人ですから、そりゃもう、シンドかったです。で、案の定犯人はソレだったもんで、ハハハ、

「バカ！」と叫んで、本ぶつけました。それ以来私、世にいう〝論理〟をバカにし続けてます。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そしてみんな引っくり返って——私とアガサ・クリスティー

私が普通に〝読書〟というものが出来るようになったのは、二十歳になってからだった。それまでは本の活字を追うのがオックウでオックウで、本を読むことが面白いと思ったことなんかほとんどない。だから私には、普通の〝本を読む大学生〟が十代の前半ですませておく〝推理小説体験〟というのがなかった。だから、私の推理小説観は、どこかで歪んでいるのである。

私の〝読書〟というのは、筒井康隆と鶴屋南北で始まる。この二人に出会わなかったら、私は多分作家になんかなってなかったし、本なんか読んでもいなかっただろう。私が〝読書〟を始めたその頃に『東海道戦争』が登場して、『東海道四谷怪談』じゃない鶴屋南北も知ったのである。その頃の筒井康隆とは、たとえていえばほとんど神技に近い今川焼の名人で、片端から目にも止まらぬ早業で〝既成〟という名の今川焼を引っくり返して焼いていた。一方の鶴屋南北は何かといえば、オドロオドロしさとドタバタの絶妙なるミクスチュアで、結局私の推理小説観が〝オドロオドロしい〟と〝引っくり

返し〝だけになるのは、この時の原体験が多分、尾を引いているのである。

私の中で筒井康隆の現在と鶴屋南北の江戸は、簡単に一直線の一つだったのであるが、そういう一直線はあまりにも真ン中が空きすぎているので、その途中を埋めるという作業が始まる。桃源社の『神州纐纈城』に始まる国枝史郎の復刻と、講談社の江戸川乱歩全集である。前近代のオドロオドロしさは、こうして近代理性と結びついて推理小説となり、やがて横溝正史全集へと続く(角川文庫の遙か以前である)。この横溝正史の見事さといったらたまらないもので、前近代と理性の葛藤をここまでうまく料理したものを、私はあまり知らない。そして、〝横溝正史は日本のディクスン・カー〟というところから、私はいよいよ本格推理の世界に入って行くのだが、そこへ、三一書房からの復刻版『虚無への供物』がやって来るのである。こういうものから推理小説の世界に深入りするということは、多分ありえない。こういう〝推理小説によって書かれた反推理小説〟というものは、推理小説体験の初めにあるものではなく終わりにあるものだから、私は、初めから、入り口と出口を取り違えているようなものなのである。出口に立って中を覗くことは出来ても、出口から中には入れない。しかし、まァ覗くということは勿論「入りたい……」ということの表れでもあるから、私は推理小説の名作を読もうとするのだが、しかし、『虚無への供物』の後の〝名作〟が面白い訳もない。これはもうしようのないめぐり合わせの悪さで、とってもつまらないだけだった。

そう言っていたら、〝推理小説体験〟をすませていたガールフレンドが「『Yの悲劇』は絶対に面白い！　論理、論理、論理だから」と言うものだから読んでみたが、ちっとも面白くない。「どこが〝論

理〝だ?」と、私は『Yの悲劇』から〝論理の悲劇〟へと入って行ってしまっちゃったのだが、そのことはよそで書いたような気がするので、割愛する。

結局、今から二十年前の私に残ったのは、横溝、カーを別とすると、アガサ・クリスティーとカトリーヌ・アルレーだけなのである(もう一つ戸川昌子の『大いなる幻影』も忘れられない)。

カトリーヌ・アルレーは本格推理の作家ではないであろう。これは〝心理サスペンス〟という、そういうジャンルである。なるほど〝女性特有の〟ではあるな、と思うのではあるけれども、私が問題にしたいのはちょっと違う。どうして推理に〝心理〟は持ちこめないのかという、そういうことである。本格推理に心理を持ちこむと、これが〝本格〟として成立するのは最初の一作だけである。二作目から、作者は徐々に別の方向へ行ってしまう。〝謎解き〟を主眼とした本格推理ではなくして、心理サスペンスになったり本格のまがいものになってしまうのはその為だが、なぜそうなのかといえば、人間心理というのはそれほど魅力的な対象であるからであり、と同時に、本格推理の根幹をなす〝謎解き〟が、心理という曖昧なものを嫌うからである。本格に対して〝変格〟があり、トリックに対して〝フェア・アンフェア〟の論争があるのもその為であるが、しかしじゃァ「一体、人間の心理というものは、それほどまでに曖昧なものなのであろうか?」という問いだとて勿論ある。人間の心理だとて、明確的であり論理的だと私は思うのだが——というより、もっとも明確で論理的であるものが人間の心理であるが故に人間は論理というものを持ちうるというのが私の考えであるが——しかしこの際そんなことは関係がない。なぜならば、「心理を排除するものが本格であり、そうでなければ〝謎解き〟

というものを楽しむことが出来ない」という大前提に乗っかっているのが〝本格推理〟と称されるものだからである。

本格推理は、ある意味で〝型物〟の芝居に等しい。能や文楽や歌舞伎のように、〝心理を解釈する〟という形で頭から入って演じるのではなく、〝型〟を演じることによってそこに心理を現出させる、という、そういうものである。重要なのは〝型を演じきること〟なのであって、そこに心理が現出するかどうかは、二次的な結果論なのである。極端なことを言えば、型が演じきれていれば心理などなくていい——心理を超えるということが可能であるというのも、こうした結果だ。

だから本格に心理はいらない。もっと明確に言えば、心理を排除しなければ本格ではない、ということである。横溝正史が〝前近代と理性の葛藤をうまく料理した〟と前に私が言ったのはここである。うまく料理したから、理性は前近代のオドロオドロしさを排除して、心理的になるところを免れたのである。スレスレのところまで寄せて来て、葛藤というゴタクサを現出させるように見えて、スッとさばけば、両者はきれいに分断されて理性は勝つ——推理の糸が通るとは、こんなことである。『Yの悲劇』のつまらなさというのは、結局〝呪われた家系〟というオドロオドロしさの中に埋没してしまうところで、これをよしとするなら、『Yの悲劇』は〝本格の装いを凝らした変格〟ということになるのだが、別にそういうことにもならない。結局のところ、作者のエラリー・クィーンが〝心理とは曖昧なものであるから、厳密に論理的である為に心理は排除されなければならない〟という、近代男性特有の論理に従って、〝呪われた家系の血〟という決めつけを敢行しただけである。だから私は〝論理

的〟と言われる男の論理が嫌いだ。男の論理があれば、勿論女の論理だってある。だがしかし女にとって、心理に関する前提は、男のそれとはまったく違ったものになる。

男にとって〝心理とは曖昧なものである〟だが、女にとっては心理とは〝メンドウクサイもの〟である。だからそこに深入りして〝女性特有の心理サスペンス〟も生み出せるし、「どうでもいいわ！」で心理ゼロの〝本格〟も生めるのである。前者がカトリーヌ・アルレー、後者がアガサ・クリスティーであることはいうまでもない。

角川文庫版『オリエント急行殺人事件』の解説で、訳者の古賀照一はこんなことを言っている。

> 客観化の徹底、ということは、更にもう一つのことを意味します。それは、「小説とは、作者の不在証明だ」というアンドレ・ジッドの言葉の完璧な実践が、女史の作品だということです。その作品、たとえば「オリエント急行殺人事件」では、作者の主観や個人的感情が露骨に語られないばかりか、はっきりと消されている。

こんな文章を、〝メンドクサイもの〟を内部に抱えていながらもそれを「曖昧だ！」として斥ける男性論理の世界に属していた、その結果苦悩せざるをえなかったアンドレ・ジッドに読ませたら、「いいなァ……」としか言わないだろうが、アガサ・クリスティーは自分の作品の中で〝作者の主観や個人的感情〟を〝消す〟必要なぞ、全然ないのだ。なにしろ彼女は、そんなものを作品の中に一切持ち込ま

ない――「持ち込む必要がなかったから」という単純明快なパーソナリティーだったからではなくして、「そんなメンドクサイものちょっとでも持ち込んだら収拾がつかなくなっちゃうわよ」ということを、彼女が知っていたからだ。まともな女なら――ということはドメスティックでありうる女なら、ということだが――こんなことはみんな知っている。女達のある部分は「そんなメンドクサイことしたくない」だけで、あっけらかんと平然としているのだ。

アガサ・クリスティーにとって、推理小説を書くことは完全に〝遊び〟であった筈だ。これほど一切の人間心理を排除して、オドロオドロしさも排除して、それで完璧に「人が殺されている」という状態が平然無事に登場する作品群は、そうとしか理解されない。人間心理につながる一切を排除しきれた時、彼女は「さァ、始めるか」で、作品の根幹をなすトリックを組み立て始めるのである。

アガサ・クリスティーが他の一切の作家とは違っているのは、彼女が〝完璧なる本格〟であるからだが、彼女の〝完璧なる本格推理小説〟を目の辺りにして初めて分かることが一つある。それはつまり、「本格推理小説のトリックとは、結局その小説を成立させる根本トリックにある」ということである。

本格推理は〝型物〟の世界であるが、それは勿論〝約束事の世界〟ということである。約束事(ルール)をはずせば、世界は成立しない。と同時に、必要なだけの約束事を守っていれば、その世界をどのように変革してもかまわないということである。

本格推理の約束事とは「殺される被害者がいる、犯人に擬される容疑者がいる、犯人を探す探偵がいる、そしてその経過を見守る読者がいて、読者が探偵となることが可能なように、一切の手がかり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com